

第6回青森県生涯学習審議会会議録【概要版】

日時	平成30年6月11日（月） 15:00～17:00
場所	青森県庁議会棟 1階 A会議室
出席者	<p>《 委員 》 敬称略 12名 （欠席3名） 上澤 司 長岡 俊成 岡 詩子 菊地 倫子 白戸 美也子 出崎 真里 松本 大 柏谷 至 住吉 治彦 増田 由美子 春藤 千秋 工藤 清子 （欠席 天内 不二子 奈良 陽子 奥島 涼子）</p> <p>《 事務局 》 7名 和嶋 延寿 （教育長） 渡部 靖之 （生涯学習課長） 小舘 孝浩 （学校地域連携推進監） 宮野 孝晶 （企画振興グループマネージャー）他3名</p> <p>《 その他 》 1名 山本 洋史 （総合学校教育センター 教育活動支援課副課長）</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 案 件</p> <p>（1）報告書案について （2）今後のスケジュールについて （3）その他</p> <p>4 閉 会</p>
配付資料	<p>次第・座席図 青森県生涯学習審議会委員名簿 第13期青森県生涯学習審議会報告書案</p> <p><封入資料></p> <p>① 青森県基本計画未来を変える挑戦（平成30年度プロモーション編） ② 平成30年度 青森県の社会教育行政 ③ 平成30年度 青森県総合社会教育センター要覧</p>

会 議 の 内 容

(◆会長 ◇委員 ○事務局)

案件（１）報告書案について

◆会長

案件の(1)にある報告書案について、まずは事務局からご説明願います。

○事務局

第1章は「本県の若者をめぐる現状」として各種調査のデータを引用しながらまとめています。第2章については、事例発表と先進事例実地調査をもとに書き起こしました。第3章は、皆様の発言を元に書き起こしました。全体的には、県民へ向けた提案となりますので、よりわかりやすい表現になるように注意しました。巻末資料として、県外先進事例実地調査レポートのほか、審議経過と名簿、参考資料等を掲載しました。

◆会長

メインの議論は第3章になるかと思うが、各章でのご意見、ご質問を伺いたい。

《第1章 本県の若者をめぐる現状》

◇委員

2ページ目の「④の若い世代ほど、親や先生、近所の人からほめられたり、叱られたりした経験が多い」とあるが、親や先生は確かにそうだと思うが、近所の人はこちらに入れて良いのか、数値が高いと言って良いのか、経験が多いと言って良いのか難しいと思った。表を見ると、(14)から(17)は近所の人との関係ですが、30代が多いというところも微妙である。

もう1つは3ページの(2)の「本県の若者は自己有用感と自己肯定感が低い」という表記について。内容は自己有用感があるとこんなに良いことがある、行動や態度に影響があるということが、3から4ページで指摘されている。しかし、本県の若者は自己肯定感が低いと示している数字やデータが見つけられない。大丈夫かどうか確認したい。表現の問題だが「本県には自己有用感と自己肯定感が低い若者がいる」くらいで良いと思われる。また、3ページの「社会関係資本」というのは一般的にわかりにくい用語なので、何か注をつけた方が良いと思う。

◆会長

指摘の1点目は表1に関する部分だが、近所の人との関係が年齢の高い人ほど頻繁にあるとは、必ずしも読み取れないのではないかと。30代が結構多くなっている。全体の論旨に問題があるというよりは、むしろデータの示し方である。20代が一番高ければそんなに気にはならない。30代が高くて20代が低くなっているのが気になる。

○事務局

まず1点目の2ページ④の近所の人からほめられたのところは、一応30代も若者としてとらえて入れた。確かに20代は、50代、60代と変わらないというところまではきているが、検定の結果でも、これについてはかなり差がある。やはり20代が17.3%と低いのでちょっと厳しいのではないかとということであれば、この部分は表現を変えていきたい。

◇委員

全体的な流れとして、おそらく家族との関係が良い、学校との関係も良い、地域の近所の人との関係も良いとなると、悪いところがないという話になってしまう。悪いところを探そうというわけではないが、近所の人との関係が課題だということにつなげた方が(4)などにもつながっていくと思った。

◆会長

近所の人との関係が課題だというのは、本文の中に入れて良いのか。

○事務局

人間関係の部分については、我々が思っている以上に若い年代というのは、結構関わりがあ

るところは、最初の部分において、調査ではこうなっているとのことを示したかったという思いがある。ただ実際に、近所の人達との関係というよりも、社会全体として若者達にどう関わっていかなければいけないのかという部分を、後半の方で実地調査を含めて示していった方が良いのではないかと思われる。ここは素直に調査の結果からは、このように読みとれますというところを伝えておいた方が良いのではないかと考えた。

◆会長

少し専門的な話だが、ここで使っている χ 二乗検定は変数間に直線的な関係があるかどうかを評価する指標ではない。つまり、年齢によって差があるということは言えるが、若い人ほど評価が高いと言ってしまうと、統計的にはミスリードである。例えば、今の表現では、「20代では低いけれども30代では他の年代に比べてあきらかに高い」といった表記であれば間違いはない。全体の主張が変わるわけでないが、データの使い方がおかしいと全体の主張も説得力を持たなくなるので、少し慎重になった方が良い。

○事務局

④の部分については、「近所の人からほめられたりした経験」の部分については、説明の中の下あたりに30代は高いけども20代は低いという結果になっている説明を加える程度にとどめておくことにしたい。

○事務局

20代と30代の差を比較することは何か意味があるのか。全体的に言いたいのは、「若い年代ほど親や先生からほめられたり叱られた経験が多い」ことを書きたいだけで、単純にタイトルから「近所の人から」を取ることで良いのではないか。

◇委員

本文の方だと、「近所の人からほめられたり叱られたりした経験」について触れていないので、タイトルから取れば良いのではないか。「若い世代ほど親や先生にほめられたり、叱られたりした経験が多い」として、本文はそのまま変更なしで大丈夫である。

○事務局

了解しました。

◆会長

最初の指摘のうち2点目の論点は、3ページ目のタイトルが言い過ぎではないかということだと思う。青森県の若者のうちで自己有用感が高い人と低い人ではかなり意識や行動が違うことは確かに調査からわかるのだが、他県との比較をしているわけではないので、本県の若者が他県と比べて低いとは言えない。29年の調査では、他の年代に比べて若者の自己有用感が低いと言えるのだが、報告書で引用しているデータだけからは、青森県の若者の自己有用感が低いとかどうかわからない。どういうタイトルが良いか。大事なことは自己有用感を高めることが大事だということを言いたいわけで、これも報告書全体の論旨に関わるというよりも表現上の問題である。

◇委員

自己肯定感という言葉が題名で使われているが、本文や表の中に出てこない。自己有用感だけで良いのではないか。

◆会長

自己有用感とは、自己肯定感と言われているもののうちの構成している要素の一つなので、そこは少し丁寧に説明したほうが良い。自己肯定感の話が1個も出てこないというのは、読んでいて違和感を持つ方がいるかと思う。

○事務局

タイトルについては、委員の方々から、青森県の若者は自己肯定感が低いのではないかという意見があったので、それを裏付けるために県教育委員会が行った調査を引用させてもらった。

確かに本県の若者が実際にそうになっているデータとしては不足しているため、改めてもう少しデータがないかどうかを確認するとともに、自己肯定感についての説明も加えていきたい。

◆会長

本文には自己有用感という言葉しか出てこないで、自己有用感で良いのかもしれないが、この審議会の議論では、自己有用感を含んだ自己肯定感全般について議論したのは事実である。つなぎの表現が入れば良いのではないか。例えば、「自己肯定感の低さがしばしば指摘されている。それを青森の若者について実証するために、自己有用感を実際に調査した。」といった表現が挿入されると良い。その結果、自己有用感の高い若者と低い若者で意識や行動に大きな差があり、それは社会的経験や定着意欲にも影響がされており、自己有用感を含めた自己肯定感を高めることが大事であるという結論につながられる。

○事務局

郷土を愛する心に関する県民の意識調査では、自己肯定感に関しての調査結果が年代で比較する形となっている。その部分についてはもう少し検討を加えていく。

◆会長

3点目の論点として「社会関係資本」の注釈がないことがあげられていた。県民の皆様は読まれてもわからないかもしれない。「社会関係資本」とは、その人の生活の維持や進路選択やなどに役に立つ人間関係を、ある種の資本見立てて使われる用語である。少し説明を加えてはどうか。

◇委員

3ページ注釈5について、これ以外の説明はないのか。注釈の説明を見るとわかりづらい。

◆会長

あまり正確でない表現である。信頼性係数というのは、作成した尺度が役に立つかどうか確認するもので、信頼性係数の大小を分析で使っているわけではない。自己有用感尺度については、「他人にとって自分が役に立っているかどうかをいくつかの観点で聞いてそれを点数化にしているもの」といった説明で十分ではないか。ここにあまり技術的なことを書き込むことはない。

◇委員

7ページの(5)「若者の学習・生活体験と県内定着に関する県民の意識調査」では、裕福な家庭環境で成長した社会的に恵まれた若者は、大学等に進学する割合が高く、活躍のチャンス求めて県外に出る割合が高いという結果が出ている。逆に、現在の生活に不満を抱いたり、職業的に不安定な人は、将来の見通しもなく県外に出ていきたいと考えているとあるが、裕福な家庭環境とか、その人達が大学進学する割合が高いと書かれている。どのデータでわかるのか。言葉的にはとても乱暴でないかと思われる。いくら経済的に厳しくても自分で希望を持って県外で勉強しようと頑張っている方もいる。どこからこのデータを読み取ったら良いのか。家族を経済的に支えたいというところかと感じるが、何か偏見を含んだ文章に感じてしまう。表現の仕方を変えた方が良い。

○事務局

調査報告書の考察の部分でまとめている言葉を持ってきているが、確かにデータがなければ、これは本当にそうなのかと思われるので、表現等や引用するデータについては検討させてほしい。

◆会長

調査報告書の趣旨は、県外に出て行く人の動機や社会的背景を探る分析だった。その結果、社会経済的に恵まれた人と、反対に不利な人が県外に出て行くことが分かったものだ。ただ、それを逆転させて、恵まれた人は県外に出て行く、恵まれてない人も県外に出て行くというと、確かに言い過ぎで、多分これを最初から読まれる方にとっては、それでは青森県に誰が残るの

かと疑問に思うかもしれない。

○事務局

調査の結果を受ける形での分析になっています。

◆会長

この後にもうワンフレーズあると良いのではないか。調査結果ではこう出ているが、そこから何を読み取るかといったような一言があった方が良い。

《第2章 若者と地域をつなぐ取組事例》

◆会長

第2章では、ゲストに来ていただいた事例発表や委員が視察に行かれた事例を整理したものをまとめたものである。忌憚のない意見をお願いしたい。

◇委員

デザイン的な話ですが、第2章から文字が急に少し大きい字になった気がします。行間のつまりを一定に広くなっているところがあり、パッと見て分散されて文字が文字に見えないような部分がある。7ページまでのデータ解説しているところのフォントでも十分見える気がするので、そんなに大きい字にしなくても、小さい字にしたほうが見やすいのではないか。

◆会長

体裁は、全体としてのフォントを統一する予定なのか。

○事務局

第1章は調査を基にした解説がメインで、ポイントを押さえても良いかと思っておりました。第2章からは、審議会としてはこのようなことをしてきましたという部分なので、ポイントをあげた方が良いかと思いました。確かに全体的なバランスを整えた方が見やすいということであれば、そのようにすることは可能です。

◇委員

文字の大きさに対して、文と文との間が広く見えるので、それで文章としてのまとまりがなく見える。もしできれば、文字の大きさはそのまま、行間がもう少し少ない方が文章としてのまとまりがあり見やすくなる。漢字が多い文章は黒い部分が増えるので文字として見やすくなる。ひらがなが多い文章は、白い部分が多くなるので、ぱっと見た時にちらちらと見える。内容が専門的であったりすると、ぱっと見たときに難しいと思いきやそんな内容だったりタイトルだったりするので、見た時に見えやすいデザインの方が、最初読まれる方も読みやすい。できるだけ調整した方が読みやすいと感じました。

◆会長

原稿作成の技術的問題なので、事務局におまかせし、見やすいようにしてほしい。

◇委員

太字のタイトル12ページ東北高校生交流会“横の繋がりから生まれる大きな可能性”太字で書いている字とその後の本文の文字の大きさに差をつけたりとか、もっと太字にするとかすることにより、見やすさが上がる。

○事務局

第1章のほうが見やすいということか。

◇委員

最初の方が見やすい。それは図が入っているからだと思うが、文章の区切りがありリズムがある。後半になるにつれ文字だけになり、読む時にリズムが取りづらい。フォントとかでリズムを付けた方が良いかと。また知識がない方でも読みやすいと思う。

◆会長

少し工夫をお願いしたい。

◇委員

クリエイトとA-Paradiseの事例発表の内容があるのですが、発表について私達も聞き、今後若者達にどのようなサポートが必要なのか、事例発表から一歩進んだことについての何か文章が必要かと思った。何回目かの会議で、青森でも実際に生き生きと活動している人達がいるので、その人達の話聞いてもらったらどうかといった意見を言わせてもらったが、先進事例についても大事ですが、実際に若者たちが、自分の生き方を見いだせない若者達ばかりだけでなく、実際に活動して試行錯誤しながら日々活動している若者たちがいるわけで、その話を聞いたので、そこから見えてくるものとか、大人がこういったところに手を貸してあげようとか、質問のあたりでは、ちょっと先が見えるような話題になったように思われるが、事例発表の概要だけでは寂しい。

◆会長

A-Paradiseの方々が来たあとも、長めの意見交換し、視察事例に関しても色々と意見交換している。その結果は第3章に反映されているのだと思うが、第2章の終わりにでも簡単なまとめがあっても良いのではないか。今委員が言われた通り、青森でも活動を頑張っている方、生き生きと頑張って活動している若者がいること、若者を支えるための仕組みも見えてきたことなど、まとめとして述べた上で、第3章につないでいければ良いのでは。第2章が事例報告だけで終わると次の章へのつながりが見えにくい。第2章の事例の後に簡単なまとめを1段落分くらいあると良いのではないか。

○事務局

確認ですが、第2章については取組事例のまとまりで、あくまでも取組についてのまとめです。委員の方々から意見や今後、県として目指してほしいことについては、第3章で全てをまとめる形で書いています。今の話でいくと、事例発表についてはその後に委員の方々からこういう意見があったということについて、それぞれの最後の方に入れるということで良いか。

◇委員

どういう形が良いかは、具体的にはわかりませんが、事例発表の報告だけで終わってしまうのがどうかと感じた。皆さんが違和感なければこのままで良いのですが、第3章にいかされていると考えるということが良いのか。

◆会長

執筆者としての意図としてはそういう位置付けだと思う。第1章では若者の問題点について指摘し、第2章では取組事例の概要を紹介している。その意味で整合性はあるのだが、読む側としては、やったことから何がわかったなど、多少あっても良いのではないか。県内にもこういう意欲的な若者の取組があったことがわかったとか、他地域で若者を支援するための取組があることがわかったなど、3行くらいで良いので明記したところで第3章につなげられれば良いのでは。個別の委員の意見がどうだったかについては、第3章に書けば良いと思う。

○事務局

第2章は事例、県外の事例については巻末資料として委員の皆様のレポートをそのまま掲載しており、それを整理した形で第2章に掲載している。第2章と第3章のつながりが足りないと感じたので、各事例の最後に審議会に出た意見を中心に目立つように書き加えたい。そこをもとに第3章につながりますという流れで考えていきたい。第2章はそのように進めたいと考えますが良いか。

◇委員

第1章と第2章のつながりの方が気になるところがある。どうして第2章で青森の2つの事例をとりあげるのかということの方が大事なのかなと思う。そのためには第1章の最後のあたりか第2章の最初のあたりに、青森県に若者の現状があるが、青森で若者が活躍できる持続可能な地域づくりにどういうことが必要なのかということで、こういう事例を取り上げました。と

いった1文があればどうだろうか。

◆会長

第2章と第3章のつながりもそうであったが、第1章と第2章のつながりにも何かワンクッションほしいということか。

◇委員

第1章の何を受けて、第2章の取組事例につなげられるのかを考えた時に、いくつか気になった調査結果があり、6ページの下から3行目の「地域社会をよい場所にするための自分なりの貢献ができていない」また、7ページ(5)の2行目「どのように地域貢献すれば良いのか、地元でどのように自分をいかしていけばいいのか分からない」、「地域の活動に携わりたいと考えていても」そこのところは、図10の自分の能力を生かせそう13%しかないところとつながってくる。そういうところを参考事例がA-Paradiseとクリエイトを取り上げたという経緯があるのではないかと。そういったところを(5)の下あたりに、次の章につながるように、それらを受けてこういう団体を選出しましたとしっかり書くべきではないだろうか。

クリエイトと既存の中学校や高校の生徒会の部活との違いについては、踏まえておく必要があるのではないだろうか。どこの学校にも生徒会があるのではないかという意見もあるかと思われる。高校を横断してやっていて、高校というフィールドを飛び出して商店街と共存しているので、非常に特徴的なところであると思われる。選出した理由をもう一度各委員の発言を掘り起こして書いてほしい。ちょっと取り上げた意味が薄くなる。

A-Paradiseについてはテーマ型のコミュニティではないか。芸術とか音楽とか組織が年代をまたがる場所が特徴である。それが結果として、第3章の伴走型コミュニティというところにつながる。何が言いたくて、そのために必然的に事例紹介したのが、県民の皆さんにわかりやすいのではないかと。そのためには、青森県で働きたい理由の下位に位置している、自分の能力が生かせそうだというところをクローズアップして報告書にまとめていくのが良いのだろうかと思う。

◆会長

全体として、第2章の前後とのつながりが必要だという意見だ。少し検討していただきたい。第2章について他にご意見があればお願いしたい。

◇委員

11ページ以降の特定非営利活動法人というタイトルと本文中が特定非営利活動法人とNPO法人が混在しているので統一した方がよい。15ページ以降、西暦と元号が一緒になっている。基本的には西暦が書かれてあるが、15ページ以降では、西暦表記がいくつかあったりしているので、統一した方がよいと思う。

また、ISHINOMAKI2.0をどう扱うのかという問題もある。調査したのは「いしのまき学校」でISHINOMAKI2.0はその母体となっている団体である。どちらをどうとりあげて良いのか、判断が難しい。高校生との対話を軸にした取組紹介というところで紹介されているので、そうすると母体となっているISHINOMAKI2.0の紹介よりは、いしのまき学校の高校生との取組をプロジェクトでやっている活動の紹介した方がよいかと思った。

◆会長

法人の名称や西暦の表記に関しては全体として報告書としての書きぶりを統一すれば良いことなのでお願いしたい。より重要なのは、ISHINOMAKI2.0の扱いの方だが、いしのまき学校の取組み自体をテーマとするか、いしのまき学校を運営しているISHINOMAKI2.0という団体をテーマにするかで書きぶりが違って来る。委員としては、いしのまき学校の方をメインにした方がよいという意見だろうか。i)~vi)まではISHINOMAKI2.0の活動。15ページまでの内容は、基本的には、ISHINOMAKI2.0の内容である。いしのまき学校に関しては、どういう文章になるだろうか。

◇委員

いしのまき学校は ISHINOMAKI2.0 の中にあって、いしのまき学校というのが高校生を主体として取組をしている活動である。

◇委員

具体的な内容は、街なかをキャンパスにして、地域の人の話題を見つけ、地域で困っている人を探し、それを解決する過程を話し合う。

○事務局

37 ページにそのまま掲載していますが、それを読むと高校生と地元の企業との語り場を作っている。これについては、第3章でも取り上げているので、本来は第2章に入っていなければならない。一番肝心な部分が抜けている。

◇委員

第2章で母体を取り上げるのは良いのだが、いしのまき学校の説明を入れるべきである。

○事務局

母体の活動は、もうちょっと簡略化して良いか。第3章と関わらないところがあるが、委員の皆様にごく実地調査するかについてお諮りする時に、資料としてこれらの団体概要については、皆さんに提示している。訪問した時に対応したくださった方がいしのまき学校の担当だったので、いしのまき学校の中心の話を知っていたので、今回取組を紹介していくことになるのだが、ISHINOMAKI2.0 は、いしのまき学校だけでなく、高校生達に様々な機会を与えて活動をさせていることがあり、どういった取組が行われているか、主なものをここに紹介していく形であるが、ご指摘の通りいしのまき学校についての説明が入っていないため、いしのまき学校についての説明を書き加えることとする。

《第3章 若者が生き生きと活躍できる持続可能な地域社会づくりに向けて》

◆会長

それでは、第3章に移りたい。

○事務局

説明いたします。1つ目が成長段階に応じた地域との関わりで、これまでの審議会でも委員の方々から出されていましたが、子供の頃からしっかりと地域が関わって育てていかなければいけない。このことを踏まえつつ、これまで行ってきた事例発表と実施調査の話を踏まえながらやはり子どもの頃からさらに幼少期の頃から、しっかりと地域の中で育てていかななくてはならない。そのためには、必要なことをしっかりと地域のよさを教えて行く必要があるということを中心としております。①として幼児期から青年期まで「地域のよさ」を学ばせる基礎づくり子どもの頃の体験活動の多さが郷土を愛する心を育てていきますよ。調査の結果から明らかにされています。②として幼児期から様々な体験ができるよう地域全体で支援する基盤づくりが必要。③として幼児期から青年期まで各年代に応じた「地域のよさ」の学びが必要です。成長段階に応じてそれぞれの地域の良さの受取方が異なってくるのでその年代に応じた学びが必要です。④として 23 ページとなりますが、それらをコーディネートできるコーディネーターが必要ではないか。

2つ目として、小・中・高の縦の連携と地域の横の連携によるキャリア教育の推進①としてキャリア教育の説明、地域で頑張る大人が手本となることを記入しています。②として年代に応じて地域の役割を担う体験が必要。学びではなく、役割を持たせて、体験させることが必要である。③として 24 ページですが、地域の様々な団体が互いの強みを生かし、互いの弱みを補完し合いながら連携することが必要。先進事例実地調査の宮城県の部分を持ってきております。

3つ目として、地域社会全体で若者を育てる機運の醸成が必要です。①として若者の活動を地域住民に広く周知することが必要。②として地域の課題をチャンスと捉え、前向きな気持ち

に変える工夫が必要。25 ページ2つ目の柱ですが、若者を受け入れる側の環境整備が必要。一つ目は、あおもりで若者が活躍できる環境の整備を、まず、若者に寄り添い、若者の自主性を尊重しながら支援することが必要です。二つ目は、若者が次代の若者を育てていく。新たな「伴走者」を増やしていく取組が必要と述べています。26 ページ②学校や地域、企業とが連携することが必要。まず①として、地域全体で目指す「地域人財像」こんな若者を育てていくという目標を共有し、関係者それぞれが役割を明確にし、関わる必要があります。27 ページ「伴走者コミュニティ」を作ろう。それぞれ、伴走者として関わっている大人達がコミュニティという形を作り、連携を強化していくことが有効ですと、最後までまとめています。これまで審議会でも出された意見、事例発表、実地調査で頂いた意見やレポートでの感想からまとめているものになっております。

◆会長

それでは、これからご意見をお願いしたい。

◇委員

23 ページのキャリア教育のところですが、小中高と書いているが、幼稚園・保育園そして大学も含めた連携が必要である。現にPTAは小中高連携した形でないでいこうと動いている。次は、大学や専門学校でもこの流れがある。最終的には書いていますが、企業在り方を入れていくべきではないか。キャリア教育は本当に大事なところではないか。小中高だけでは足りないと感じた。

◆会長

大学キャリアサポートプログラムなど、大学生が高校生に教えることもある。小中高というタイトルだが、幼稚園・保育園から大学・専門学校までの縦の連携が必要と書いても、内容的には違和感ないと思う。

◇委員

23 ページの『子どもたちの実態に応じた「地域のよさ」の学びのコーディネーターを育成する』という部分の中に、その章の下から3行目のところですが、「宮城県の各団体の若者にはその力が十分に備わっています」という一文がちょっと気になった。そのあと読んでいくと、随所に宮城県ではと続く部分があるので、ちょっと違和感がある。十分に備わっていますと断言しているので、気になった

◇委員

実際に行って見学して、話してくれた団体さんが実際そういうことを話していたのでこのような形になっているが、宮城県が確かに多く出てくるので気になるかもしれないが。

◇委員

わかるのですが、宮城県がという部分が気になった。

◇委員

青森県がないのかなと思われているが、青森県にはいる。点になっている部分を、線にするのがうちのメンバーである。情報の共有化がなされていない。

◆会長

表現上の問題だと思う。事例の紹介と県の方針一般についての議論が、わりと交互に頻りに場面転換をしている。宮城県の子どもはみんなコーディネート力が持っているという話ではない。我々が視察に行った宮城の若者はという事例の話である。

○事務局

これらを述べるには根拠となる部分がどうなのか述べていく必要がある。審議会として、根拠となるものが、これまで扱ってきた調査の結果と事例発表取組と先進事例実地調査の行った各団体の取組になる。引用する時に、この若者とはそれこそ代表の理事の方々である。理事の方々それぞれ20代から30代で若者世代の方々代表となり、その方々がコーディネート

を行いながら取組を行ってきたことが、今回調査になって明らかにされたため、その部分を前段にきちんと置いた形での書きぶりになっている。

◆会長

この2行の表現で言うと、このような環境を整えるためには、宮城県での各団体の若者がもっているコーディネート能力が大切ですよということになると違和感がない。大事なのはコーディネート力を養うことが大事だという主張だ。ところが、現在の文章では、コーディネート力の重要性よりは、宮城県がすごいということが前面に出ているように見えるので、そこはもう少し調整が必要。ここは文面の表現上の調整をすることとする。いくつかそういう点が見受けられたという話なので、少し検討いただきたい。

◇委員

23 ページ目の②の地域で頑張る大人が手本となると小見出しがついているが、ここの文章を読んだ時に、該当する文が見つけられなかった。これをもし入れるのであれば、地域の課題をチャンスにとらえるというところにか、地域で頑張る大人が大変重要な要素だと思われるので、24 ページ目の文章にうまく入れられないかと考えました。36 ページ目の指摘で郷土愛だけでは不十分、新しい価値を創造することが必要というところがすごく印象に残った。その郷土愛がすごく高い若者ほど、自分たちが育ってきた郷土に生きる大人たちが新しい価値を創造するという意欲を失ってしまう、幻滅をしてしまう。そうすることでUターンしようという気持ちがなくなる。結果的には都市部に残される。すごく大事なポイントではないだろうか。このような報告書を出すのであれば、地域で頑張る大人が手本となって、郷土に新しい価値を作り出すという活動をモデルになるように、自分たちが率先して行うことによって、若者頼みではなく、大人たちが子どもたちに手本を見せる。郷土愛だけでなく新しい付加価値や創造の活動を若者と一緒に取り組んでいく意欲や姿勢を見せていくといったことを報告書で見せていかないと、前半部分については、そうだろうという内容がほとんどであろう。幼少期からいろいろな体験活動させるとか、郷土愛などを育むなど。24 ページの③の以降が、この委員会の中で新しいことを盛り込んでいくのか、皆さんと知恵を絞りたい。

◆会長

今の発言では2つの指摘があった。まず1つ目は、23 ページの②の最初の小見出し、地域の頑張る大人の話が本文にあまりでてきていないということ。もうひとつは、③の2つ目の見出しのあたり、もう少し新しい価値の創造が入ってくるのがいいのではないかと、という指摘だと思う。全体の内容に関わる指摘なので、ほかの委員からの意見も聞きたい。

◇委員

27 ページ伴走者のコミュニティを作ろうというところで、このメリットは、若者の地域の意識に影響を与えることができるというところがとても大事だと感じた。目次で第3章の(2)で若者を受け入れる側の環境整備となっているが、ここはもう少し、意識と環境整備といった強いインパクトがほしいと思った。

◆会長

②に関しては考え方として、大人が手本という話を本文中に入れるのか、あるいは見出しから削除するのか。

○事務局

本文中に入れたい。皆さんにまとめてもらったレポートもあるので、書き加えたい。

◆会長

後半の24 ページの新しい価値の創造のフレーズを、本文に盛り込むのはどうか。

◇委員

郷土愛を様々な組織連携で育てているので、それが根付いて地元に残りたいという若者がいる一方で、流出しているところの根本要因、自己実現であったり、自分がやりたい仕事地元

にない、相談相手がいない、帰ってきても語り合える場所がない。複合的な原因がある。そういつた時に委員が話された、大人たちの意識改革、郷土愛を育むだけでは解決できない。意識の共有が全体を通して必要ではないか。

◆会長

その部分については、もう少し踏み込んで書いてほしい。

○事務局

検討していく。

◇委員

(2)のタイトルですが、環境整備の部分に意識を入れた方が良いというご指摘もあったが、受け入れるで良いのか。良い表現がないだろうか。受け入れるとなると、全く若者が自分達と違う存在だとなるので、そのあたりもっと仲間感がある表現が良いのではないか。

◇委員

受け入れるというよりは、入って行きやすい感じの良い言葉があれば、自分が来やすい雰囲気作りとかになれば。そんな言葉があれば良いが。

◆会長

例えば「若者の参加を促進する環境整備」といった表現だろうか。「受け入れ」というと若者が「お客様」として扱われてしまう感がある。うまい表現がないか。

◇委員

若者とともにあるとか。

◇委員

伴走者という言葉の後半で使っているの、ここに伴走者を入れるのはどうか。寄り添って一緒に歩く人という意味で、伴走者として位置付けて、若者世代より上の大人方のことを趣旨的に言っているが、伴走者にした方がある意味大人とかに限定されない気がするの、(2)のところに入れても違和感ないのかと。伴走者というのはキーワードになっている言葉なので良いのではないか。

◆会長

例えば、若者に伴走する環境整備とか。伴走者の環境整備などが良いのでは。ここでキーワードを出しておいておくのも良いのではないか。

◇委員

見出しは、結論になるので、趣旨とも合うので、伴走者となる側の環境整備、意識の持ち方。伴走する側とかどうだろうか。

○事務局

環境なので体制組織とかも含まれると考えますが、伴走という言葉は人になってしまう。受け入れる側その環境というのは、人もそうだが、組織等も考えられるので、その辺りについては検討したい。

◇委員

若者が飛び込む。受け入れるは違うのではないか。

◆会長

ご検討頂きたい。

◆会長

巻末資料について1つ指摘しておきたい。ここでは委員の皆さんのレポートを載せる形となる。表現上の問題については個別に相談していくこととする。いくつかのレポートで、応対してくれた方の実名が表記されていることが若干気になった。個人名を出すことで相手に迷惑がかかったりするおそれがないか、執筆者と事務局と相談して決めてほしい。

全体を通して、もう一度言い足りない部分があればお話しいたきたい。

◇委員

第3章の部分ですが、是非クリエイトとA-Paradiseについて触れてほしい。25ページの真ん中のあたりの段落の「彼女は」のところからが文書が切れているので直してほしい。

◆会長

青森の事例を入れてほしいということか。

◇委員

郷土愛だけでは不十分である。新しい価値の創造をすることが必要な部分で、県内からこちらの学校に入り、こちらの郷土の素晴らしさというものを感じて、こちらに定着したという方の事例が、この委員の中で発表があったと思われる。Uターン、Iターンした方からの目線での青森県のよさ、郷土を愛する、青森県を愛する心という話し合いがあったような気がする。そういった方が、より私達はここに住んでいて気づけないところが、気づけたということがどこかに入れた方が良いのではないかと。新しい価値の創造ですが、まさに工芸品とかでも、どんどん進化させているものがあり、そこにどんどん若者が入り込んでいて、このあたりが今後先につながっていくと思う。また担い手など、そういった方々が必要である。そして県外の方から見た目線というものも大切である。だから私達も気づいていこうという部分をどこかにとらえていけたらと思う。

◆会長

県内の事例でもしばしば見られたと思うが、コーディネーター的な役割を果たしているのが、外来者であるケースが視察した事例でもあった。よそ者と呼ばれる方々が積極的な役割を果たすのが多いのではないか。それはどこの地域でも多い。

◇委員

様々なところであちこち一生懸命にやっている方々がいるが、それが情報として入ってこない。そういう伴走者といわれる人がいっぱいいる。ここの議題に出てこないのが寂しい。実は生まれてずっと住んでいる人には良さはわからない。青森に戻ってきた人たちが青森は良いと感じる。実はそんな方々を仲間に入れて巻き込むと一生懸命にやってくれる。

◆会長

第3章の「伴走者のコミュニティを作ろう」に個別の人のネットワーク化が出てきているので、ここで触れるのも一案である。また冒頭の「成長段階に応じた関わり」の中に、Uターンとか地域の外からみた地域の良さを知るという部分で言及する手もある。そのあたりで検討してほしい。

◇委員

18ページの第2章シブヤ大学のところですが、ちょっとこの真ん中くらいの公開講座の下から始まる文書が、本当の大学のように感じてしまうのではないか。初めて見た人が、教育機関としての大学ではないことを、一言入れた方が勘違いしないのではないか。ちょっとした文章があった方が良いのではと感じた。注釈があった方がよく、誤解が少ないと思った。

◆会長

表現上の問題なので、説明を1行2行足せば良いかと思う。

◇委員

写真とかイラストを使えないでしょうか。

○事務局

写真は許諾が必要なので、了解を頂く作業が必要になります。経費の関係で厳しい。

報告書のページ数の影響も出てくるので、写真を入れられるか検討したい。

◇委員

A-Paradise、クリエイトに事例発表してもらった。27ページの伴走者コミュニティ作ろうの根拠の理由として、宮城県の各団体の実地調査をする中での文章がある一方で、A-Paradiseと

クリエイトが触れられていないことが寂しい。おそらくクリエイトに関しては学生達の団体だったところに、商店街の人達が、伴走者となって活動舞台を作ってくれた。コーヒーの作り方を教えてくれたりして、伴走してくれたからクリエイトの活動がある。A-Paradise の事情はわからないが、おそらく青森市の関わりがある。実行委員に入って、一緒に運営しているのではないか。伴走者コミュニティを作るところには触れてほしい。地縁血縁型のコミュニティの限界について青森県まで出てきている。人口減少によりコミュニティが破壊されている状況がある中で、たまたま A-Paradise をやっているメンバーが、昨年むつ市でまさカリズムといった音楽イベントを行ったが、いきなりやって 3,000 人が集まって、バンドが 25、幼稚園から年配の方までのバンドを組んで面白いことを行った。そのきっかけが、A-Paradise だと思われる。地縁血縁でなくて、共感して活動がどんどん広がっていく典型なのか。伴走者コミュニティにしても大事な提案だが、共感型コミュニティについてそういうこともこの全体の報告書のあちらこちらに要素があるのではないか。無理矢理入れるのは大変かもしれないが、地域の中で閉塞感になっている光になっているもの共感、伴走だろうな。そういったことを見つけながら、調べたり事例発表したり、成果がでるのではないか。全体を通した時に必要なければ良いですが、キーワード的にでも少しでもあれば入れてほしい。

◆会長

第3章で見ると、1の①成長段階に応じた地域との関わりの中に、テーマ型コミュニティ、つまり関心や、やりたいことを共有している人同士の人間のつながりが、新しい要素として登場してきている。ある程度自分の思考とか方向性とかはっきりしてきた高校生、社会人にとっては、そんな関係の持つ力が結構強いということを入れていけるのではないか。大事な指摘だと思うので、新しい要素として注目していくべき。

◇委員

なかなか表面に出てこないが、若者がコミュニケーション能力がないと言われるが、共通のものがあると、すごく人との輪を広げている。五所川原でも大きなイベントをやると、新しい人が取り入れ、同じ世代の県外の人も呼んで、そんな話を聞くと私達世代、一般の大人達に伝わらない部分があるが、世代が違っていても 20 代、30 代の方々と音楽とか芝居とか表現の類いの中での共通の何かがあるとすごく親近感が湧くし、私としては、彼らが何かあれば相談があればサポートする立場でやっているが、そこがもっともっと知られれば実態を探っていければ実感できていくのかなと感じた。大人達が関心を持って探っていただければと思います。

◇委員

自分達の地域には関心があるが、他地域に関しては意識していない、住んでいる人の大きな問題があるが、音楽というテーマで切り取った時に、地域を超えて下北と青森がつながっている。若い人たちが可能性を感じている。また、SNSを使ってつながっている。都市部と住んでいる人たちと通じている。そういうところも可能性があるのではないか。やっているけどお互いが知らない。

◆会長

今までの事例の中にも地域おこしだと関われないけど、音楽イベントだと手伝うことができるなど、もうちょっと色を出しても良いのかもしれない。

案件1に関しては、これからまた集まって頂くのは難しいので、ここからは私と事務局との間で文面の調整をさせていただきたい。

案件（2）今後のスケジュールについて

※事務局から説明

案件（3）その他について